

的場
友見

「
サロガシ
」

登場人物

江島 環 (28) ハウスメーカーに勤める建築設計士

江島 聡 (38) 環の兄。フリーランスのSE

江島 彰子 (61) 環と聡の母。専業主婦

江島 忠 (70) 環と聡の父。元建築設計士

水野 圭人 (41) 聡の恋人。大手銀行員

江島 光 (0) 環が産んだ聡と水野の子供

西岡 麻友 (38) 産婦人科医。聡の元恋人

野池 幸四郎 (28) 環の同僚

メアリー・ホプキンス (40) 英会話教室の講師。アメリカ人

種田 美奈子 (41) 環の客

看護師

先輩 1、2

作業員 1、3

○江島家・リビング（22年前）

逆立ちになっている江島環（6）、スカートがめくられてパンツが露わ。

環「お兄ちゃん、パーパあ！見て見て」

身支度をしている江島忠（48）と

江島聡（16）が環を見る。

聡「環、パンツ丸見えだよ！」

えへへと笑う環。逆立ちをやめさせ、

環の頬を叩く江島彰子（39）。

彰子「パパとお兄ちゃんに何見せてるの！」

ショックで呆然と彰子を見つめる環。

環を睨みつける彰子。

○同・同（現在）

テーブルを挟んで座っている江島忠

（70）、江島彰子（61）と江島環

（28）。環をじっと睨みつける彰子。

彰子を睨み返す環。

忠「は？4ヶ月？誰の子だった？」

環、お腹にそっと手を当てて。

環「お兄ちゃんの子」

わけがわからないという感じで考え込
む忠、ハツと思いついたように、

忠「ま、まさか……」

江島聡（38）が入ってくる。

聡「ごめん！遅くなっちゃった」

忠、勢いよく聡に殴りかかる。

聡、倒れる。激昂した様子の忠。

忠「お、お前！お前！じ、実の妹に」

環「ちょ、やだ！違う！」

彰子「お父さん！そんなわけないでしょう」

忠「だって環が、お前の子を……」

再び聡を殴ろうと拳を上げる忠、

聡「違う！俺はゲイだ！」

は？と、振り上げた拳を止める忠。

水野圭人（41）が入ってくる、

水野「聡！大丈夫？」

聡と忠の間に入る水野。忠の後ろから
彰子が飛び出してきて水野を拳で殴る。

水野の手から虎屋の紙袋が宙を舞う。

× × ×

氷嚢を頬に当てて聡と水野が並んで座っている、その向かいで潰れたモナカを食べる環。拳をタオルで冷やしながら部屋をうろつく彰子。

彰子「んもお、わけがわからない。お父さんが寝込むのも当然よ」

○同・和室

布団に入り苦悩の表情で目をつぶっている忠。

○同・リビング

聡と水野、環と彰子がテーブルを挟んで座っている。

環「私の妊娠っていう嬉しい話を先にすれば、お兄ちゃんがゲイっていうカミングアウトの衝撃和らぐかと思ったんだけど」

聡「ごめん。俺が先に言ってくべきだった」
水野「いや、僕が……」

彰子、大きなため息をつく。

環「何で？お母さん嬉しいでしょ？孫の顔見たいって、いつも言ってたじゃない」

彰子「は？あんた本当バカね。そんな単純な話じゃないでしょ？」

環、ムツとした表情でモナカを食べる。

聡「俺、圭人と付き合ってる。もう10年になるね」

頷く水野。彰子、顔を手で覆い、

彰子「……ん」

水野「生涯を共にしたいと考えています」

彰子「はあ……」

環「で、子供が欲しくても、2人では子供を作ることはできないでしょ？」

彰子「……」

環「だから、私の卵子と圭人くんの精子で赤ちゃんを作って、妊娠しました」

彰子「……」

環「いやあ、頑張ったよねえ」

彰子、顔を上げて、

彰子「やめて！親の前で、よくそんな……」

環「え、やだ。違う。違う」

吹き出す環、カッとなる彰子。

彰子「何！何なの！だいたい、環、あなた、出しゃばり過ぎなんじゃない」

環「は？」

彰子「好きでもない人と子供作って、それで、10ヶ月そのお腹で育てるの？産むの？産んで、お兄ちゃんにあげるの？」

環「そう」

彰子「あなた、それじゃまるで、子供を産む道具じゃない。ツールじゃない。気色悪い」

環「ツールじゃないわ。サロガシーよ」

意味がわからないという彰子の顔。

彰子「聡」

聡「はい」

彰子「あなたが、その、男性と付き合っているっていうことは、お母さん、百歩譲って、受け入れる努力をするわ。うん。ただ、ただね。子供を持ちたいなんて、それは、そ

れは贅沢言い過ぎなんじゃない？」

険しい表情で俯く聡。聡を心配そうに見つめる水野。

環「は？何？同性愛者は子供を望んじゃいけないの？差別よ！」

彰子、ダンッとテーブルを叩く。

彰子「差別とかそういう話してるんじゃないの！私は家族の話をしているの！」

○同・和室

布団で横になっている忠、じーっと宙を見つめている。

○同・リビング

テーブルに両手をついて肩を震わせている彰子。

環「家族？ふん……」

立ち上がり、出て行こうとする環。

彰子「待ちなさい！勝手に！許さないわよ」

環、足を止めて彰子に背を向けたまま、

環 「別に許可もらいにきたわけじゃないから。
ただの報告だから」

出て行く環。言葉が出てこず、悔しそ
うに環の背中を見つめる彰子。

聡 「俺は、圭人の子供が欲しい。圭人と子供
と一緒に幸せな、俺がずっと憧れていた幸
せな家族を作りたい」

彰子 「何よ、何なのよ……私が、お母さんが、
何したって言うのよ」
うなだれる彰子を見つめる聡。

○落合総合病院・外観

○同・産婦人科待合室

妊婦や乳児を抱いた女性が数名ソファ
に座っている。それを見て、幸せそう
に微笑む聡、その隣でノートPCを膝に
乗せキーボードを打つ環。

環 「お母さんの言うことなんて、気にするこ
とないからね」

聡「まあ、想定内の範囲内だったけど」

環「圭人くんまで殴られるとは。でも、さすがに妊婦は殴らなかつたね」

聡「環のこと心配なんだよ。出産の大変さを知っているし」

環「は？そんなわけないでしょ。あの人が可愛いのはお兄ちゃんだけ」

聡「……」

看護師の声「江島さん」

○同・診察室

白衣の西岡麻友（38）が、診察台で横になっている環のお腹にエコーを当てている。エコー画像を見守る聡。

麻友「14周目ね。うん、順調順調」

嬉しそうに目を合わせる環と聡。

麻友「はい、いいですよ」

デスクに移動する麻友。起き上がり、服を直す環、時計を見ながら、環「よかった！打ち合わせ間に合う」

麻友、母子手帳に記入しながら、

麻友「あ、聡にちよつと話あるの。環ちゃん
急ぐんだったら先出てて大丈夫よ」

環「じゃあ母子手帳、お兄ちゃん持ってて」
笑顔で返す聡。

○同・廊下

急ぎ足で遠ざかって行く環の後ろ姿。

○同・診察室

向かい合って座る聡と麻友。

麻友「どう？ご両親納得してくれた？」

首を横に振る聡。

麻友「そう。親族間のサロガシーは、他の家
族の理解が難しくってトラブルになるケース
もあるらしいから…：うーん」

聡「麻友、ありがとね。色々心配してくれて」

麻友「妊婦さんが安心して元気な赤ちゃんを
産めるよう努めるのは、産婦人科医として
当然のことです」

聡、笑顔で返す。

麻友「妹が俺の彼氏の子を妊娠した”つて元彼が嬉しそうにやって来た時は、全く意味がわかんなかったけど」

聡「やば。改めて聞くと、わけわかんないね」
おかしそうに笑う、聡と麻友。

麻友「環ちゃん、今のところは大丈夫そうだけど……」

聡「うん。赤ちゃんを手放すこと、実際環がどう感じるのか……」

麻友「正直産んでみないとわからないのよね。赤ちゃんに対してどんな感情を抱くか」

悩ましげな表情の聡。

○タナカホームプラン・外観

2階建ての新しい事務所。

○同・打ち合わせスペース

4名ほどで打ち合わせ中。その中に、環と野池幸四郎（28）がいる。

先輩1「と言うことで、着工は来年の1月半ばを目処にと」

先輩2「ダブルインカムなんだけど、奥さんの方が稼ぎよくて、決定権は100パ奥さん。女同士の方が細かいとこまで気が回っていいだろうから、江島頼むな」

環「わかりました」

手帳を開き、1・2月のカレンダーを見る環。2月10日『分娩』とある。

○同・廊下

ノートと手帳を小脇に抱えて歩く環。

野池がやってくる。

野池「大丈夫？お前、女だけど細かいとこまで気回らないじゃん」

環の肩についた糸くずをつまむ野池。

ビクッと身をかまし、野池を睨む環。

野池「何だよ」

野池、フウッと糸くずを吹き飛ばす。

環「セクハラ」

野池「嘘だろ?!」

環「女だけど、仕事とあらば細かくもなれませう」

環、スタスタ歩いて行く。

野池「あっそ」

○カフェ・中

母子手帳をめくりながら、コーヒーを飲む聡、表紙の『お母さんの名前』欄が空白であることに気づく。聡、バッグからペンを取り、名前を書こうとするが、神妙な顔で手を止める。

○区民センター・貸し教室・外

『区民アカデミー英会話』の張り紙。

○同・同・中

中高年の男女が10名ほど、帰り支度をしている。その中に彰子もいる。

ホワイトボードの英文を消すメアリー

・ホプキンス（40）に、周りを気にしながら駆け寄る彰子。

彰子「ハイ、メアリー」

メアリー「Hi, Akiko. 質問ですか？」

彰子「ええ、あの、サロガシーって何かしら」

メアリー「サロガシー？ Oh」

メアリー、少し驚いた後、ホワイトボードに英単語を書き始める。

他の生徒がいないことを確認する彰子。

メアリー「Surrogacy」

ホワイトボードを見る彰子。

Surrogacyと書かれている。

彰子「Surrogacy」

メアリー「赤ちゃん代わりに産む人、代理母のことです」

彰子「代理母……」

メアリー「彰子、代理母するの？」

彰子「まさか。ノー！」

メアリー「日本は代理母 No?」

彰子「ノーよ！ 道德違反だわ。母に代理なん

てないわよ」

バタバタと出て行く彰子、その背中を不思議そうに見つめるメアリー。

○聡のマンション・外観（夜）

○同・仕事部屋（夜）

PCでプログラムを書いている聡。

水野の声「ただいまあ」

○同・リビング（夜）

スーツ姿の水野、ネクタイを緩めジャケットを脱ぎ捨てる。聡がやってくる。

聡「おかえりー。ってもお！ハンガー掛けて」

水野「うん。あとでやる」

ため息をつきながら床の上のジャケットをハンガーにかける聡。

聡「今日ね、検診行ってきた」

水野「どうだった？」

聡「順調だった」

水野「そう。よかった」

ソファに座る水野。隣に座る聡。

聡、水野の頬に手を当てる。

聡「腫れ、だいぶ引いたね」

水野「ああ、全然大丈夫だよ」

聡の頬に軽く触れ、ふふっと笑う水野。

水野「お母さんの方が強かったみたいだね」

聡「ごめんね。昔からヒステリーなの」

水野「ヒステリーの語源って知ってる？」

聡「え？」

水野「ギリシア語で“子宮”って意味のヒス

トワって言葉から来てるらしいよ」

聡「子宮って」

聡、下腹部に手を当て子宮のジェスチ

ャーをする。頷く水野。

水野「女の方が感情的になって取り乱すのは、

子宮の中で虫が暴れるからだって言われて

いたらしいよ」

聡「何か、差別的ね」

水野「うん。そんな風に言うのは止めよう。」

親だから感情的にもなるんだよ」

聡「親だから……そうなんだろうね」

水野「本当に環ちゃんを巻き込んでしまつてよかつたのかな」

聡「あの子が望んでいることでもあるのよ。

散々話し合ったじゃない」

水野「そうだね。僕たちの子は、もう生きているんだもんね」

聡「うん。どう迎えるか、どう幸せにしてあげるかだけを考えよう」

優しく頷く水野。

○環の部屋・居室（朝）

綺麗に片付いたワンルーム。

姿見でお腹の出具合をチェックしている環。下腹部がふっくらしている。

環、嬉しそうに。

環「わぁーお」

○建築現場・外

大きな戸建て住宅の建築現場。
タナカホームプランの現場シート。

○同・中

ヘルメットをかぶった環が図面をチェックしながら歩いている。

環、工具に躓き、転びそうになる。

○同・外

休憩する3名の作業員男性たち。

野池が乗った社用車が止まる。

環が工具を手にやってくる。

野中、車から降りて環に声をかけよう

とするが、環が声を上げて遮る。

環「ちよつと！これ、誰のですか？」

作業員たち環を見る。

作業員1「俺のだよ」

環「現場離れるときは工具片付けてください

い！廃材も置きっぱなしでしたよ。現場が

荒れていると建物の質まで疑われるんです

からね！お願いしますよ」

戻っていく環。

作業員2「ヒステリー」

作業員1「股から血出る日だな。あれは」

作業員3「やべ。何か興奮するわ」

作業員2「うわヘンターイ」

ガハハと笑う作業員たち。

険しい表情の野池。

○走る野池の社用車

○同・中

運転席でハンドルを握っている野池。

無表情で助手席に座る環。

環をチラチラ見る野池。

環、野池の視線に気づいて、

環「何？私のこと好きなの？」

野池「ちげーよ！」

環「あっそ」

野池「何だよ、何かカリカリしてんな」

環「ヒステリー？」

野池「聞こえてたのか」

ふんと鼻で笑う環。

環「あんなの聞き飽きたわ。別にカリカリしてない。女は楽しくなくても笑ってないとダメなの？」

野池「そんなことないけど。お前の笑った顔は俺、好きだぞ」

環、ニコツと大きさに笑顔を作って野池に見せる。

野池「いいじゃん」

環、ため息をつく。

野池「何でため息？！」

環、呟くように、

環「めんどくさい。何で女なのよ」

野池「え？」

環、お腹にそつと手を当て見つめる。

環「女であることの意味を、ちようだい」

○江島家・外観（夜）

○同・リビング（夜）

ダイニングテーブルに向き合って座り、
沈黙の中、食事をする忠と彰子。

忠「連絡は？」

彰子「ええ。昨日メールしたら、聡、すっかり腫れ引いたって。心配いらないますよ」

忠「……」

彰子、箸を持つ手を止め、

彰子「あの子は、聡は、昔から優しいから。
好きって言われたら断れないのよ、そう、
それでそうなたただけなのよ、きっと、だ
から同性愛者とかそういうんじゃない」

忠、彰子を遮って、

忠「環は」

彰子「え？ああ、さあ。連絡はないです」

再び食事を始める彰子。

忠「そうか」

彰子「あの子、何でああなのかしら。仕事だ
って、医療事務とか幼稚園の先生とかね？
女の子なんだからそういうのにしなさいっ

て言ったのに、あなたの真似して設計士だなんて。男ばかりのところに。嫌だわ」

忠「関係あるのか？仕事」

ふてくされる彰子。

彰子「だからあ、あなたや聡の気をひきたいだけなのよ。昔っから。私のことは目の敵みたいにして。ひどいわ。一生懸命育てたのに」

箸を置いて席を立つ忠。

忠「寝る」

彰子「え？やだ、全然食べてないじゃない。

お父さあん」

出て行く忠。

彰子「何よお」

○同・書斎（夜）

机に座り、そっと引き出しを開ける忠。

引き出しの中、古い写真が数枚。

一枚の写真を取り出し見つめる忠。

江島家4人の家族写真。

幼い聡を抱きしめる若かりし頃の彰
子と、赤ちゃんの環を抱く、若かり
し頃の忠。

忠「……」

○環の部屋・玄関・中

鍵を手に、出て行く環。

○同・玄関・外

忠が立っている。

環が出てきて、忠と出くわす。

環「お父さん！」

忠「おう」

環「えっと、今、ちょうどお兄ちゃん家行く
ところなんだけど、一緒に行く？」

忠「いや、環と2人で話したいんだ」

不思議そうな顔の環。

○同・居室

キッチンでコーヒーを淹れる環。

デスクの上の建築物の模型を興味深げに見つめる忠。

環、コーヒーをテーブルに運びながら、

環「あ、それ。私のドリームハウス」

忠「随分でかい家だな。個室も多い」

環「1組の夫婦とその子供、なんて枠にとらわれない、一緒に生活したい人たちが集まって暮らす家」

忠、ソファに座り、コーヒーを飲む。

環もコーヒーを飲む。忠、慌てて、

忠「ダメだろ！妊婦はコーヒー飲んじゃ」

環「え？大丈夫よ。ノンカフェインだから」

ふふっと笑う環。え？という顔の忠。

環「そんなこと知ってるなんて意外」

忠「調べたんだよ」

驚く環。

忠「悪いが、男同士の両親に育てられる子供はどのようなかとか、そんなことは二の次だ。父さんはな、環のことが心配なんだ」

環「お父さん」

忠 「出産は命がけなんだろ？妊娠中だって、
いろんなリスクがあるだろ？それに、それ
に無事出産できたとして、環の人生は？戸
籍に残るんじゃないのか？結婚は？相手に
なんていう？子供は？自分の子供は？」

環 「お父さん。ごめんね。私、結婚はしない。
自分の子供なんて、別に欲しくない」

忠 「何で！何でそこまで自分を犠牲にする必
要があるんだ！」

環 「犠牲じゃない。これは、この妊娠は私の
望みでもあるの。私自身の結婚や子供は、
私が求める幸せではないの」

忠 「何でだ？まだ諦める歳じゃないだろ？」

環 「諦めるとかそういうことじゃなくて」

忠 「じゃあ、何だ。何の話だ？」

苦悩の表情を浮かべる環。

○ 聡のマンション・リビング

ダイニングテーブルを囲む、聡と水野
と彰子。彰子、紅茶を飲む。

聡「で、何？どうしたの？急に」

彰子「この前はごめんなさいね、えっと……」

水野「水野です」

彰子「そう。水野さん。私、ちよっと取り乱してしまつて、ねえ。ちゃんと水野さんがどんな方なのかお話ししたくて」

聡、鬱陶しそうにため息をつく。

水野「こちらこそすみませんでした。ロクにご挨拶もせず。聡さんとのことや環さんのサロガシーの話を、順も追わずに」

彰子「サロガシーね……。で、水野さんお仕事は？何をなさってるの？」

水野「MIS 銀行に勤めています」

彰子「まあ、銀行マン！立派ねえ。大学もいところ出てらっしゃるの？聡もね、中等部から……」

聡、彰子を遮って、

聡「どうでもいいだろ。勤め先だの大学だの」
彰子「よくないでしょう。お母さんも聡も頑張つて、いい大学出て立派な企業に就職し

たんだから、お相手だつて」

聡「立派な企業は辞めたよ」

彰子「は？何言ってるの？世界で一番大きなパソコンの会社でしょ？辞めた？」

聡「今はフリーで仕事してるよ。家で。子供とずっと一緒にいられるようにね」

呆然としている彰子。

水野「もちろん僕も育休は取りますし、聡さんだけに負担はかけません」

彰子「辞めた？フリーって何よ……せつかく聡「ダメだ。また話になんないわ。圭人、ごめんね」

席を立ち、出ていく聡。

彰子、水野の手をぎゅっと掴んで。

彰子「ねえ、ご両親は？」

水野「え？」

彰子「お宅のお母さんは？お父さんは？知ってるの？」

水野「すでに2人とも他界しています」

彰子「そう……じゃあ、じゃあ、生きていた

ら！生きていらっしやったら、何て言うと思うの？」

水野、少し考える。

水野「小さい頃、母に言われたんです。お母さんのために、夢を諦めてって言ったら諦めるか？って」

彰子「は？」

水野「僕、うんって答えました。そしたら、ぶん殴られました。あ、グーじゃなくパーですけど」

彰子「やだ……」

水野「あなたが夢を諦めることで、私が幸せになることはありえないって」

彰子、一瞬ハツとするも、

彰子「そりゃ、あなたはいいわよ。何の痛手もないもの。でも、うちの子は？聡は会社までやめて、環だって……何が夢よ！」

静かに立ち上がり、出ていく水野。

彰子、頭を抱える。

戻ってくる水野、手には『家庭用シリ

ンジ法キット』と書かれた箱。

不思議そうに箱を見つめる彰子。

水野、箱を開けながら、

水野「僕たちは、病院で妊娠の手助けを受けることはできないんですよ。だから自分たちで、これで」

水野、彰子にシリンジを1つ手渡そうとするが、彰子、手を引っ込めて拒絶する。

水野「環ちゃんも聡さんもすごく勉強して、食事とかタイミングとか、でも、すぐにはできなくて。やっと。これ、3箱目です」

シリンジの箱をマジマジと見る彰子。

箱の中には未使用のシリンジが10セットほど。

聡「環ちゃん、負担だったと思います。心も体も。サポートする聡さんだって。でも諦めずに頑張ったんです。頑張ってるんです」

彰子、恐る恐るシリンジを1本手に取って見る。

水野「必ず、幸せにします。息子さんも、娘さんも。赤ちゃんも」

彰子、ぐっと堪えるように俯く。

○江島家の前の道（夕）

トボトボと歩く忠、彰子、お互いの存在に気づく。

彰子「あら、お出かけしてたの？」

忠「ああ、ちよつと」

並んで歩く彰子と忠。

2人の正面から、幼い兄妹とその両親と思われる4人家族が楽しそうに歩いてくる。

その様子に目を奪われて足を止める彰子と忠。女兒を愛おしそうに抱く母親、男児とじゃれ合いながら歩く父親。

忠「うちは逆だったな」

彰子「そうだったかしら」

忠「いや、俺なんていないようなもんだったか。仕事にかまけて」

彰子「仕事やら、浮気やら」

忠「……」

彰子「聡が甲斐甲斐しく環の面倒を見て、父親役をやってくれていたわ」

忠「そうか。そうだったな」

彰子「ねえ、お父さん。聡と一度話してきてくれない？」

忠「え？」

歩き出す彰子、本心を誤魔化すように
明るい調子で。

彰子「あの、水野って人、銀行員で、賢いんだか、口が立つのよね。私、うまいこと言えなくて」

忠、歩きながら。

忠「わかった。じゃあ母さんも、環の話聞いてきてくれ。女同士じゃないとわかんないこともあるだろう」

彰子、悩ましげに目を伏せ、

彰子「ええ。そうね」

○種田家・リビング

手狭な部屋の中、子供のおもちゃが散乱している。

激しく声をあげて走り回る7歳くらいの女兒と4歳くらいの男児。

テーブルにつき、その様子を引き気味で見つめる環、隣に野池。2人の向かいに座る種田美奈子（41）、お腹が大きい。

野池「事前にご要望はお伺していたので、早速プランに落とし込んでお持ちしました」

設計プランの資料を広げる環。

美奈子「わー仕事早いですねえ」

喧嘩を始め、大きな声をあげる女兒と男児。

美奈子、気に留めず資料を見る。

環「ご長女様と一番下のお子様とでは7歳年齢が違うということで、成長の過程に合わせて可変性のある作りに……」

ぎゃーッと一際大きな声を上げる男児。

美奈子「静かにして！」

ビクツとする環と野池。

泣き出し、美奈子の足にまとわりつく

男児。いじけて床に突っ伏す女児。

美奈子「リビングにウオークイングクローゼ

ットって珍しいですよ？どうして？」

環、子供達に目を奪われて呆然として

いる。

野池「江島、江島！リビング収納の話」

環「あ、はいっ。えっと……」

○同・玄関・中

環と野池を見送る美奈子。

美奈子の足に絡みついて甘える男児。

野池「では、お見積もりも含め、詳細つめて

まいります」

笑顔で会釈する環。

美奈子「江島さんはお仕事いつまで？」

野池「え？」

美奈子「産休、いつからなんですか？」

驚いて環を見る野池。

環「あ、いえ、大丈夫です。お受け渡しまで
ちゃんと……あ、いや……」

美奈子「やだ、いいのよ。体が一番なんだから。
設計まできちんとやっていただければ、あとは大丈夫よ。ねえ、野池さん」

野池「え……あ、はい。もちろんです」

○ファミリールレストラン・外観

郊外にある一般的なファミレス。
駐車場にタナカホームプランの社用車が止まっている。

○同・中

ステーキをガツガツ食べる環。
向かいに座り、環を見つめる野池。

環「何よ？私のこと好きなの？」

野池「いや、ちげーだろ。お前、まじ？」

環「今、6ヶ月。妊婦ってすごいね。初めてバレたわ」

野池、真剣な顔で考えたあと、

野池「すげー。おめでとう！」

肉を食べる手を止める環。

環「え？」

野池「おめでとう、江島」

ポロポロと涙を流す環。

野池「え！？何で！？何で泣く？！ごめん」

うろたえる野池、尻ポケットからハン

カチを出して環に渡す。

環、ハンカチで顔を覆いながら、

環「初めて」

野池「ん？」

環「初めておめでとうって言われた」

難しい顔でしばし考え込む野池。

泣き続ける環。

野池「何か複雑なの？よくわかんないけどさ、

子供ができて、生まれる、あ、お前が“産

む”のか。産むって、すげーことじゃん。

めでたいじゃん」

環「くさっ」

野池「え？臭いこと言ったかな？俺。逆にかつこいいってこと？」

環「ちがう。ハンカチ」

野池「やだーもー。この人やだー」

泣き顔で笑う環。

○区民センター・貸し教室・中

ホワイトボードの前に立つメアリー。

メアリー「はい、今日はここまでです。See

you next week」

10名ほどの生徒たち、帰り支度をしたり、出て行ったり。

暗い表情の彰子、出て行こうとする。

メアリー「Hey, Akiko」

不思議そうに振り向く彰子。

× × ×

机を挟んで向かい合って座るメアリーと彰子。

メアリー「彰子、なぜ日本ではサロガシー
NOなんですか？」

彰子「それは……」

メアリー「私、アメリカで3人子供産みました。でも育てているのは2人です」

彰子「え？」

メアリー「サロガシーです」

彰子「何で、あなた、何でそんなこと」

メアリー「何で？彰子、子供いますよね？」

彰子「いるわ」

メアリー「幸せでしょ？子供がいることは、とても幸せ」

彰子「それは、そうだけど」

メアリー「その幸せ、味わって欲しい」

彰子「だからって……」

メアリー「それに、私産むことも幸せな経験」

彰子「産むことも？」

メアリー「最高にハッピーな瞬間でしょ？可愛い小さな命がこの世界に出てきた時。感動です」

彰子、思い出すように遠い目をする。

彰子「そうだったかしらね」

○落合総合病院・産婦人科・診察室

椅子に座る環、明らかに妊婦とわかるほどお腹が出ている。環の隣に座る聡。

2人の向かいに座る麻友、母子手帳に「31W5Dと」と記入する

麻友「子宮口の開きが少し早い気もするけど」
不安そうな顔の環と聡。

麻友「まあ、今のところ無痛分娩の予定で問題ないわ」

環「良かった」

麻友「名前は？考えてるの？あ、まだ性別知らないんだったね」

環「性別は、まあ、ね」

聡「うん。僕たちみたいな場合もあるし。体の性と心の性が同じとも限らないし。物心ついてから本人が決めればいいかなって」

笑顔で聡を見る環。

麻友「そっか」

麻友、母子手帳を閉じて、表紙の氏名が空欄であることに気づく。

麻友「はい」

麻友、聡と環の方を向き、母子手帳を差し出す。

同時に母子手帳に手を伸ばす環と聡。

ハツとして手を引っ込める環。

気まずそうに母子手帳を受け取る聡。

心配そうに環と聡を見つめる麻友。

○タナカホームプラン・外観

○同・廊下

段ボールを抱えて歩く環。

野池、環の段ボールをひよいと奪う。

野池「引き継ぎ資料か」

環「ああ、うん」

野池「辞めることないだろ。一応産休も育休もあるんだし」

環「その後がめんどくさいっていうか」

野池「え？」

環「いや、いいの。そろそろ違う職場で働い

てみたいなって思ってたし。いい機会」

野池「そっか。まあ、お前ならどこでもや
っていけるわな」

環「そうかな？」

環、足を止め、顔を歪める。

環「うっ」

しゃがみこむ環。

野池「江島？」

苦しみだす環。

野池「おい！江島！」

○道

必死の形相で猛ダッシュする彰子。

○落合総合病院・病室

ベッドで眠っている環。

麻友の声「切迫早産ですね」

○同・産婦人科・診察室

向かい合って座ると麻友と彰子。

彰子「そうですか」

麻友「このまま入院して、赤ちゃんに少しでも長くお腹の中にいてもらえるよう、安静にするしかないですね」

彰子「同じ」

麻友「はい？」

彰子「私があの子を産んだ時もそうでした」
麻友「お母様。環さん、初めての経験で、強がってはいまずけど、不安なはずです。力になってあげてください」

彰子「……はい」

○同・病室

ベッドで環が寝ている。彰子が入ってくる。彰子、ベッド脇の椅子に座り、環の腹部の膨らみを凝視する。

環「あの先生、お兄ちゃんの元カノって知ってた？」

彰子、驚いて、

彰子「環！大丈夫なの？痛みは？」

環、無視してクスツと笑いながら。

環「高校の時、女の人を好きになろうとして」

彰子、気が抜けたように。

彰子「そう……全然気づかなかったわ」

環「うそ。気づいてたはずよ。認めたくなかつたんでしょ？」

彰子「そうね」

環「お兄ちゃんはお母さんの理想通りのデキのいい息子だったものね」

彰子「そうね」

環「私は？」

彰子「え？」

環「何をしてても褒めてくれなかった。お兄ちゃんやお父さんが私のことを褒めても、お母さんだけは褒めてくれなかった」

彰子「そんなこと」

環「女の嫉妬にしか見えなかった。自分の大切な男たちの愛情を奪われるのが嫌でたまらないって」

彰子、言葉を失う。

環「私、何で女なんだろうって」

涙をポロポロこぼす環。

環「女に生まれて良かったって……うん。

女を産んで良かったって、お母さんに、思
ってもらいたくて」

ハッと驚く彰子。

環「だから、私、子供を……お兄ちゃんに」

彰子、環を抱きしめる。

扉の隙間から、彰子と環の様子を見て
いる聡。聡、そっと扉をしめる。

○居酒屋・外観（夜）

こじんまりとした庶民的な店。

○同・中（夜）

カウンターに並び、酒を飲む聡と忠。

忠「お前、酒は強いのか？」

聡「ぼちぼち」

忠「そうか」

しばし無言で酒を飲む聡と忠。

カウンターの向こうのテレビ、バラエティ番組、女装家タレントが映っている。じつとテレビを見つめる忠。

忠をチラリと見る聡。

忠「お前、ああいう格好はしないのか」

視線をテレビに移す聡。

聡「しない。ああいうんじゃないよ」

忠「そうか」

忠、酒をグビツと飲み、

忠「気づかなくて、悪かったな」

聡「え？」

忠「すまなかった。お前が相談できるような親じゃなくて」

聡「父さん」

忠「今回のことも、どうせ理解されないって、事後報告にしたんだろ」

聡「ごめん。でも……」

忠「理解できない。妹に子供を産ませるなんて、全く理解できない。兄貴のために子供を産むなんていう環の気持ちもさっぱりわ

からない。多分どれだけ向き合っても一生無理だ」

聡、悲しげな表情。

忠「でも俺が理解できないからって、お前たちの判断は間違いだと決めつけるのも違う」

聡「父さん」

忠「お前、男だろ。決めたことは責任とれ」

聡「はいっ」

忠「うん」

聡のグラスに酒を注ぐ忠。

○落合総合病院・病室

環の他、3人の妊婦がいる。

環、ベッドの上で上体を起こし野池と

話をしている。

野池「私物は実家の方送っとくな」

環「ありがとう。悪いね」

野池「何だよ。しおらしいな」

環「そんなことないよ」

野池、ぐるりと室内を見回す。

野池「何か、すげえな」

環「え？」

野池「生命感？」

環「何それ？」

野池「お前、旦那は？」

俯く環。

野池「ごめん。ま、じゃ、行くわ」

立ち上がり、出口へ向かう野池。

環「野池！」

足を止め、振り返る野池。

環「あの…：退屈だから、また来てよ」

野池「おう」

出て行く野池。

ため息をつき、横になろうとする環。

斜向かいのベッド、横になっている妊

婦の手を優しく握る夫の姿が目に入る。

不安そうに、お腹を撫でる環。

○江島家・外観

○同・リビング

テーブルを囲む聡、水野、忠、彰子。

水野「すでに僕が赤ちゃんの父親であるという認知の手続きはしていますので」

聡「出産後にタイミングを見て、環から圭人

くんに赤ちゃんの親権を移す予定……です」

忠「そうか」

彰子「いつそ水野さんと環が結婚すればいいのに。そうした全部丸くおさまるじゃない。

普通の家族じゃない。環じゃダメなの？」

俯く聡。

水野「僕が結婚をしたいと思うのは聡さんだけです」

忠「母さん」

彰子「わかってる。わかってるわよ。ちよつと言ってみただけよ」

立ち上がる彰子、背を向けたまま。

彰子「聡……ごめんさいね」

出ていく彰子。

聡「母さん……」

○落合総合病院・病室

暗い表情でベッドの上に寝ている環。

聡と水野が入ってくる。

水野「環ちゃん」

聡「どう？調子は」

ゆっくりと上体を起こす環。

環「うん、何とか…：一日中寝てることしかできないから、退屈で」

環、お腹をそつと撫でる。

聡「母さんたちに親権の説明してきたよ」

環「理解してた？」

顔を見合わせる聡と水野。

水野「うん、大丈夫だよ」

環「そう」

水野と聡、椅子の下で手をつないでいる。2人の薬指にはペアリング。

それに気づいた環、表情が曇る。

聡「あと1週間過ぎれば、いつ生まれても大丈夫だって麻友が。長いよね？辛いよね？」

環、お腹の上でグッと拳を握る。

環「長いわよ。辛いわよ」

聡「ごめんね」

環「出てきちゃったらどうしようって、怖くて、いつも不安で、痛いし、腕中点滴のあとがいつぱいだし。こんな、こんなだから、パパの話とかできないから、他の妊婦さんと友達にもなれないし」

聡「環？」

水野「環ちゃん……」

環「ズルいわよ。何よ幸せそうに、イチヤイチャ。何で私だけ」

○同・廊下

妊婦や赤ちゃんを見て、微笑みながら歩く野池。

○同・病室

ベッドの上で、息を荒げている環。

聡「環、落ち着いて、ね」

環の肩や背中をさする聡。

コップに水を注ぐ水野。

水野「環ちゃん、お水飲んで横になろう」

○同・廊下

環の名札のある病室の前で足を止め、

ドアに手をかける野池。

コップが床に落ちる音。

環の声「帰ってよ！」

○同・病室

ガラッとドアを開けて入ってくる野池。

野池「江島？」

床の上、コップの水が溢れている。

環「ちゃんと産むから。産んで渡すから。ほ

っといて！帰って！」

ベッドの上の妊婦たち、環の方を見る。

聡「環……」

水野、聡の肩を抱いてなだめながら出

て行く。環と野池、目が合う。

○江島家・縁側

ポーツと座っている彰子。

忠がやってきて、隣に座る。

彰子「聡に言われたの、ずっと憧れてた理想の家庭を作るんだって」

忠「環もドリームハウスがどうか」

彰子「理想だの、ドリームだの。所詮親の身勝手よね、あの子たち見てて気づいたわ」

忠「そうかもしれないな」

彰子「私、聡がその、そうなんじゃないかって気づいてたの。ああ、理想と違うって。

完璧な男の子が欲しくて、2人目を……でも女の子で、環で」

忠「男じゃないとダメだったのか」

彰子「ダメなわけないのに。子供なのに。あなたと私の。何で頑なに。それを察して環、男勝りに活発で勉強も頑張ってる」

忠「……」

彰子「そんなあの子の健気さに気づかなくて私。追い詰めて……親失格だわ」

忠「俺もだ。今から、これからでも、親としてやってやれること、あるんじゃないか」
見つめ合う忠と彰子。

○落合総合病院・病室

床の上を雑巾で拭く野池。

ベッドの上で仰向けになり、ボーツと一点を見つめる環。

野池「どっちが父親なの？」

環「両方」

野池「え？」

野池、ベッドの脇の椅子に座る。

環「お兄ちゃんとその彼の子供なの。私はサ

ロガシー、代理で産むだけ」

野池「お兄さんゲイ？産んで渡すって、ああ。すげー混みいってるなー事情。それは予想できないわ」

環、フツと笑う。

環「野池といると、落ち着くわ」

野池「そうか」

環「でも、お腹の子は落ち着かないみたい」

顔を歪め始める環。

野池「え？ちよつと大丈夫？」

環「あんたといると赤ちゃんが外に出たがる。

あつ…：破水した」

○同・廊下

ストレッチャーで運ばれている環。

付き添う麻友。

麻友「このまま分娩室入るからね」

オロオロしながらついて行く野池。

環「いっ」

麻友「いきんじやダメ！何？」

環「む、無痛…：」

麻友「ごめん！無理だから！」

環「いやー…」

分娩室に入って行く環と麻友。

立ちすくむ野池のもとに、水野と聡が

やってくる。

聡「環は？」

○分娩室・中

慌ただしく動き回る看護師。

分娩台の上、陣痛に悶絶する環。

環を診察している麻友。

麻友「もう限界ね。出しましょう」

○同・外

オロオロする水野、聡、野池。

看護師が出てくる。

看護師「お父さん！」

顔を見合わせる3人。

○同・中

分娩台でいきむ環。

環「イターーーーーい！」

環の助産をする麻友。

麻友「はい頑張っつて！呼吸止めない！」

看護師に連れられ、帽子、マスク、エ

プロンをした聡、水野、野池が来る。

看護師「先生！お父さんどれですか？」

麻友「え？とりあえず全員立会いなさい！」

環「もうやだーーーーー！」

看護師「先生、立会いは1人だけって規則で」

麻友、聡らをチラッと見ながら、

麻友「いいの！この人たちは出産の大変さを

知る必要があるの。ほら！聡！こっち。そ

の旦那！そっち。もう一人は、誰！？！」

環「いったーーーーーお前ら、お前らのせ

いだかな！」

環の額の汗を拭く水野。

聡、環の手を握って一緒にいきむ。

環「お前、お前はいきんでんじゃねーよ！」

看護師「お母さあん、呼吸止めない」

環「お母さんじゃないいいいいいい！」

麻友「もうちよつと、ハイ！頑張れ頑張れ」

環「もうヤダアーーーー痛いーーーー」

いきむ環。一緒にいきむ聡。

苦しそうな顔で見守る水野。

○同・外

心配そうにソファに座っている野池。
忠と彰子が走ってくる。
元気な赤子の泣き声が聞こえてくる。
自然と手を握りあう忠、彰子、野池。

○同・中

分娩台の上、ぐったりした環。

麻友、環の隣に新生児を置き、

麻友「お疲れ様。赤ちゃん、元気よ」

聡「ありがとう……環」

涙を流し環に抱きつく聡。愛おしそう
に新生児を見つめ、涙を流す環。

○落合総合病院・外観

○同・エントランス・外

新生児・光（0）を抱いた聡と環が出
てくる。彰子と忠がやってくる。

聡「母さん、父さん……」

彰子「聡の家で面倒見るの？」

聡「うん。落ち着くまでは環も一緒に」

環、俯く。

忠「環はうちに来なさい」

環「え？」

彰子「体力が戻るまでうちで休みなさい。赤

ちゃんは聡と水野さんとで面倒見るの」

忠「そういうことだろ？環、聡？」

聡「はい」

環に向かって頷いてみせる聡。

環の腕を引き、歩き出す忠と彰子。

聡の腕の中でぐずり始める光。

気になって振り返る環。

大きな声で泣き始める光をあやしなが

ら歩き出す聡。

振り返って、聡の背中を見続ける環。

○車の中

運転席でエンジンをかける忠。

助手席に座る彰子。

後部座席で声を殺して泣く環。

○聡のマンション・リビング（夜）

水野の腕の中、泣いている光。

水野「よーしよし。光ちゃん。もうすぐサ
トちゃん来るからねー」

ミルクの入った哺乳瓶を持ってくる聡。

聡「あーん、ごめんねー。はい、パイパイ」

光を抱き上げ、ミルクを飲ませる聡。

ミルクをゴクゴク飲む光。

聡「かわいい。こんなにかわいいなんて」

水野「ね。ずっと見てられる」

聡「幸せだなあ……」

どこか寂しげな聡の笑顔。

それに気づく水野。

○江島家・環の部屋

苦しそうに胸をさすりながら、ベッド

で横になっている環。ノックが鳴る。

扉が開き、彰子が入ってくる。

彰子「買ってきたわよ」

搾乳機をテーブルの上に置く彰子。

環「ありがとう」

搾乳機を手に取り、じっと見つめる環。

彰子「使い方、わかる？」

○落合総合病院・産婦人科

○同・同・診察室

聡に抱かれている光、首が座っている。

光の背中に聴診器をあてる麻友。

麻友「うん。問題なし。はい、光ちゃんいいですよ」

光の服を直す聡。

聡「あの……環は？」

麻友「会ってないの？」

聡「うん」

麻友「そう。一度だけ産後の経過観察で来てもらったけど。体は問題なかったわ」

聡「体は……そっか」

○江島家・外観

眠った光を抱いた聡がやってくる。

○同・玄関・外

そうっとドアを開ける聡。

環の声「痛い！痛いって！」

○同・同・中

光を抱いたまま、階段の上を見上げる

聡。彰子が階段を降りてくる。

彰子、聡に気づくと、慌てて、

彰子「（小声）ちよっと！何してるのよ」

彰子の手には母乳の入った搾乳機。

搾乳機を見つめる聡。

聡を外へと押し出す彰子。

○同・同・外

彰子に押し出されてくる聡。

彰子、玄関のドアを閉めて。

彰子「何？どうしたの？」

聡「それ……」

彰子の手にある搾乳機を見つめる聡。

彰子「母乳よ、環の」

搾乳機に手を伸ばす聡。

聡の手を振り払う彰子。

彰子「あの子の役割は生むところまででし

よ？あなたが育てるんでしょ？これは不要

なものよ」

聡「そんな」

彰子「あなたたちの決断のはずよ」

ドアを開け、中へ入って行く彰子。

ドアが閉まる。立ち尽くす聡。

目覚めてぐずりだす光。

○同・キッチン

搾乳機の蓋を開け、母乳をシンクへ流

す彰子。

排水溝へと吸い込まれていく母乳。

それを見つめる彰子の目に涙。

○同・環の部屋

うつすらと光の泣き声が聞こえ、窓の外を見る環。光と聡の姿が見える。光をあやしながら歩いて行く聡。胸をさすりながら、じつと聡と光を目で追う環。

○走るタナカホームプラン社用車

○同・中

運転する野池。助手席には環。

野池「気持ちいいなあ」

環「休日に社用車使って怒られない？」

野池「バレないって」

環「どこ連れてく気？」

野池「お前が一番行きたいところ」

不思議そうな顔の環。

○走るタナカホームプラン社用車

○聡のマンション・玄関・中

ドアを開ける水野。

水野「いらつしやい」

野中が入ってくる。

野中「お邪魔します」

野中、振り返り、

野中「おい！来いよ」

環がためらいがちに入ってくる。

水野「久しぶり」

○同・リビング

光を抱く野池。

野池「かわいいなあ」

光を見つめる環。

野池、環に光を差し出し、

野池「ほら！江島！久しぶりだろ。光ちゃん」

聡「環」

水野「環ちゃん」

おそるおそる光を抱く環。

目を合わせる水野と聡。

水野「環ちゃん、僕らと一緒に暮らさない？」

環「え？」

聡「圭人パパと話し合ったんだけど。環が光と一緒にいたいなら、いるべきなんじゃないかって」

水野「パパ2人にママ1人、恵まれた子だね、光は」

環「お兄ちゃん、圭人くん」

環、じっと光を見つめる。

環「ありがとう。でも、ごめん」

聡「え？」

環「やっぱり、私は私1人の人生を生きるわ」

水野「環ちゃん」

環「確かに、光、光ちゃんはかわいい。でもこの子を育てることに私の一生を捧げるつもりはなかったし、今もそんな気持ちはわからない。抱いてみて、はっきりわかった」

ぐずり始める光。光を聡に差し出す環。

環「やっぱり代理で産んだだけなのよ」

聡「環……」

光をあやしながら、水野と顔を見合わ

せる聡。

環「おぼとして、光ちゃんのためにできることは何でもするから」

笑顔を見せる環。

聡の腕の中で眠る光。

○丘の上（夜）

住宅街の窓明かりを見下ろす丘。

タナカホームプランの社用車が止まっている。並んで夜景を見る環と野池。

環「何この中途半端な夜景。こんなんで口説こうとしてんの？」

野池「ちがうわ！この中に、俺らが作った家があつてさ、そこで暮らす家族がいるんだねって、熱い仕事の話さ」

環「フウン。でも確かに、この明かりの数だけ、色んな家族が、親子がいるんだろうね」

野池「後悔してるのか？」

環「してない。何にも」

野池「もう一度産みたいと思う？」

環「うーん。わからない。でも、人生で一番
幸福な瞬間だった」

環の笑顔に見惚れる野池。

野池「一番、暫定一番な」

え？と野池を見る環。

環の肩を抱く野池。

環「くさっ」

野池「ん？いいこと言ったか？俺……じゃな
くて……うそ？！え、俺？俺？」

自分の匂いを嗅ぐ野池。

悪戯に笑う環、それに気づき野池、

野池「やだーもー。この人やだー」

楽しそうに笑う環。

○江島家・リビング

逆立ちになっている光（6）。

光「パーパあ、パーパあ、見て見て！」

光、スカートがめくられてパンツが露わ。

へ了
▽